

# ノウサギの生態に関する研究 (IV)

## — 雌性の繁殖時期について —

鹿児島県林業試験場 谷 口 明

キュウシュウノウサギの繁殖時期に関する詳細な報告はいままでなされていない。筆者は1976年から野外で捕殺及び捕獲された標本と飼育獣の繁殖例により、これに関する調査を継続中であるが、ある程度の成果を得たのでここに報告する。

### 材料と方法

野外の雌成獣と亜成獣は1976年2月から1978年2月にかけて採集されたもので、主として銃殺で得ており、一部くくりわなによるものである。これらの標本は解剖により、妊娠の有無を確認し、乳線の発達状況、左右卵巣重量及び胎児重量を即座に測定した。

野外で捕獲した幼獣は1976年4月から1978年4月にかけて得た材料で、捕獲時の体重は115～442gであった。

飼育獣による出産は1977年6月からみられ、そのほとんどが出産日を正確につかめた。

### 調査結果および考察

表—1にみるように、解剖に供した野外の標本のうち、11月から2月にかけては狩猟期間にあたるので標本数は多いが、他の月は少ない。したがって特に11月から2月にかけてこれら標本の妊娠の有無をみると、いずれの月においても妊娠可能個体(卵巣重量100mg以上)のうち50%以上が妊娠中もしくは哺乳中であった。しかも、妊娠初期の胎児が11月から2月のいずれの月でもみられた。また、1976年11月18日に得た標本の胎児重量は138.6gと128.6gで出産間近であり、11月中にも出産することが考えられる。したがってこれらのことから、当期間は交尾、出産、哺乳期間であると思われる。大津<sup>1)</sup>はトウホクノウサギで、妊娠個体中最小のもので、胎児のある側の卵巣重量は407mgであったと報告しているが、当材料では217mgであった。

次いで、野外で捕獲した幼獣の出生日を推定するために、飼育下で母乳で育てた幼獣34個体を用いて体重の絶対成長を求めた(図—1)。その結果、幼獣初期にはかなり急激な体重の増加傾向がみられるが、体重300g(生後13日齢位)までは個体変異が少なかった。一方、野外で捕獲された幼獣の体重は、雄で210

±87g(24頭)、雌で201±84g(21頭)であったので、幼獣の出生日の推定には体重を用いて行なった。この方法を用いて推定した野外における捕獲幼獣の出生日を図—2に示した。幼獣の捕獲は毎月一定の方法でなされたものではないが、野外で捕獲された幼獣は2月から9月にかけて出生していることがわかる。

最後に、飼育獣の出産状況についてみたのが図—2である。出産は1月初旬から10月中旬にかけて観察された。

以上の結果を総合すると、妊娠期間(交尾から出産まで)を45～47日であるとすると、キュウシュウノウサギの交尾活動期間は、今泉<sup>2)</sup>が指摘するように、ほぼ周年にわたるものと考えられる。しかし、9月の時期には、今回の材料からでは、交尾活動期であることは知られなかった。エゾキュウサギでは、高安<sup>3)</sup>は交尾期を3月下旬から6月下旬と推定し、上田<sup>4)</sup>は2月下旬から6月を交尾期と推定しており、トウホクノウサギでは、大津<sup>1)</sup>は懐妊時期を2月から7月とし、4月から8月を出産期と報告していることから、キュウシュウノウサギの交尾期間はこれに比較し極めて長期であるといえる。

前報(Ⅲ)の表—1に示すとおり、飼育している個体の中に、1978年1月時点で性的に成獣した雌は3頭存在していたが、そのいずれもが1月1日、24日、25日に出産しており、妊娠期間から考えて11月中旬から12月初旬にかけて交尾したものと推定される。その後、6月中旬までに2～3回の出産がみとめられ、しかも、出産から次期出産までの経過日数は55日と73日を除くとすべて46～47日であった。また、前述した以外の雌3頭が1978年3月上旬から下旬にかけて初産をおこない、その後いずれも45～47日目に次期出産をおこない、そのうち4月20日に出産した個体は47日後の6月6日にも出産をおこなった。すなわち、妊娠期間(交尾から出産まで)が45～47日と考えられることから、11月中旬の懐妊から4月下旬にかけては、ほとんどの個体が出産後ただちに交尾したと考えられ、当期間が交尾の最盛期ではないかと推察される。

表-1 ノウサギの月別、左右別、妊娠および不妊別の卵巣重量と胎児重量

個体別卵巣重量 mg				
月	左	右	左	右
1	217-	182	640-	639
	(0.04)		(I.S)	(I.S)
	162-	151	179-	381
2	310-	525		
	(0.39)		(0.57)	
	(0.35)		304-	149
3			303-	494
			(-)	
	652-	368	261-	155
4	(16.9)		(-m.)	
	437-	381	408-	378
	682-	1024	(-m.)	
5	(62.4)		(-m.)	
	304-	216		
	868-	不明	480-	345
6	(I.S.)		(46.6)	
	443-	398		
	(1.0)	(I.S.)		
10	460-	455		
	(114.4)			
	(139.0)			
11	100-	94	373-	803
			(I.S.)	
	583-	994	382-	135
12	(138.6)		(54.8)	
	(128.6)		(I.S m.)	
	182-	140	286-	282
1			11-	10
			(62.8)	
	172-	237	942-	366
2	162-	164	(9.1)	
	503-	288	171-	302
	(51.6)		(0.005)	
3	177-	175	146-	128
	69-	75	84-	58
	786-	441	60-	52
4	(0.12)	(m.)		

注) I.S.は胎盤離脱痕(?)

m.は乳線発達

( )内は胎児重量gである。但し、(-)は妊娠初期の胎児で軟弱であり測定不能であった。

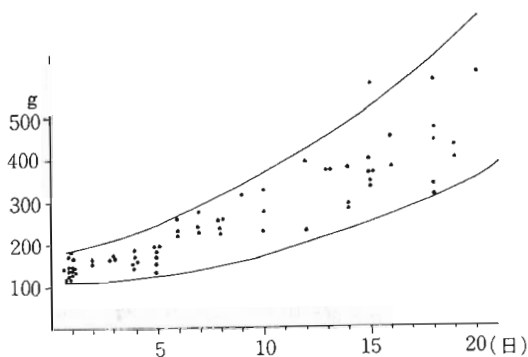


図-1 ノウサギ幼獣の生後日数と体重との関係

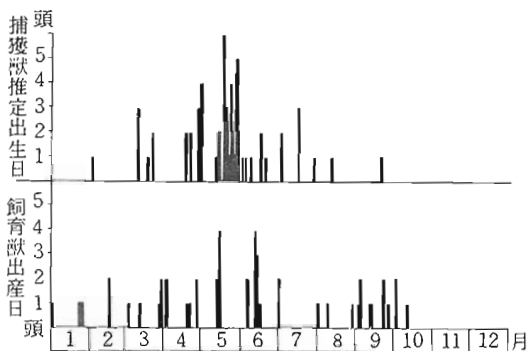


図-2 捕獲幼獣の推定出生日と飼育獣の出産日

まとめ

キュウシュウノウサギはほぼ周年にわたり交尾活動をおこない、交尾の最盛期は11月中旬から4月下旬と予測される。

引用文献

- (1) 大津正英：応動昆，9，79~82，1966
- (2) 今泉吉典：日本哺乳動物図説上巻，P.P. 350，新思潮社，1970
- (3) 高安知彦：野ネズミ，No31，1~4，1959
- (4) 上田明一，柴田義春，山本時夫：77回日林講，330~332，1966。